

髄外性形質細胞腫を経験したので概要を報告した。患者は73歳男性。上顎歯肉腫脹を主訴に紹介医受診。抗菌薬の処方を受けるも症状改善せず、2004年7月当科紹介来院した。初診時、右側上顎前歯部から臼歯部の頬側歯肉粘膜に表面不正、暗赤色、弾性軟、無痛性で易出血性の境界比較的明瞭な腫瘤を認めた。画像所見にて右側鼻翼部から歯槽ならびに口角部にかけて直径約20mmの腫瘤様病変と右側上顎前歯部から小臼歯部にかけて顎骨に骨吸収像を認めた。生検時の病理組織学的診断にて形質細胞腫の診断を得、県立がんセンター新潟病院内科に転科し、髄外性形質細胞腫の診断のもと、VAD療法を2クール施行後、局限化した残存腫瘍を切除した。摘出物に腫瘍の残存は認めず、現在も腫瘍再発や多発性骨髄腫への移行は認めていない。

4 頭頸部腺様嚢胞癌の転移様相

新垣 晋・中里 隆之・小田 陽平
小林 正治・鈴木 一郎・斎藤 力
永田 昌毅*・星名 秀行*・高木 律男*
林 孝文**

新潟大学大学院医歯学総合研究
科・組織再建口腔外科学分野
同 顎顔面口腔外科学分野*
同 顎顔面放射線学分野**

腺様嚢胞癌は神経や血管浸潤を特徴とした、局所再発や遠隔転移の多い唾液腺悪性腫瘍である。腺様嚢胞癌の遠隔転移の様相とその関連因子について検討した。

頭頸部腺様嚢胞癌29症例を対象として、遠隔転移に関連すると考えられる要因(部位、大きさ、組織亜型、切除断端の腫瘍の有無)についてその意義を検討した。また、転移様相と転移出現までの期間、生存期間との関連性も検討した。

遠隔転移は21例に認められ、肺が最も多く19例、肝4例、骨4例などであった。遠隔転移に関連する因子は切除断端の腫瘍の有無のみであった。転移出現までの期間は平均52か月、転移出現後の生存期間は平均30か月であった。肺転移単

独と肺および他臓器転移とを転移出現までの期間、生存期間で比較すると67か月と47か月、24か月と19か月で肺単独が有意に長かった。全症例の10年および15年生存率は38%、23%であり長期予後は依然として不良であった。

5 アヘンアルカロイドによる皮疹がフェンタニルパッチで改善した1症例

八木 元広・宇野 勝次・香山 誠司*

水原郷病院薬剤科
同 外科*

症例は64歳男性で、胃痛にて胃全摘後、肝転移があり疼痛緩和のためオキシコドン錠を開始。翌日、皮疹が発現しフェンタニルパッチに切り替え、その後、疼痛管理上の問題もなく皮疹も軽快した。その皮疹に対し当薬剤科に薬剤アレルギーの検出同定試験が依頼された。しかし、被疑薬剤が麻薬で試験不可であり文献調査で対応した。文献上、モルヒネの持つヒスタミン遊離作用による皮疹発現が有力で、オピオイドのヒスタミン遊離作用を比べたデータではモルヒネが用量依存的に遊離作用を示し、フェンタニル、オキシモルフォン(オキシコドンの鎮痛活性物質)はなかった。しかし、モルヒネとオキシコドンは構造式が類似するため、さらに文献検索したところ動物実験でオキシコドンがモルヒネ以上にヒスタミン遊離作用を示すことがわかった。以上より、モルヒネ製剤、オキシコドン製剤で痒み・皮疹を発現した場合、フェンタニル製剤への変更が有効である。

6 がん専門診療施設におけるオピオイド鎮痛薬および鎮痛補助薬の使用動向

丸山 洋一

県立がんセンター新潟病院麻酔科

がん専門診療施設におけるがん疼痛治療の現状とその問題点を探る目的で、全がん協加盟施設を対象として「オピオイド使用量調査」および「鎮痛補助薬の使用に関するアンケート調査」を実施した。

28施設における2004年の全オピオイド総使用量は、2003年に比較してモルヒネ換算値で23%増加し、各オピオイドの比率はフェンタニル(38.4%)、塩酸モルヒネ(27.5%)、硫酸モルヒネ(18.6%)、オキシコドン(10.1%)の順であった。フェンタニルパッチはがん疼痛治療の主薬となったが、高用量となりやすい傾向がうかがえた。塩酸モルヒネはレスキューとしての経口剤の使用量が著明に増加した一方、坐剤の使用量は減少した。硫酸モルヒネ徐放錠はオキシコドン徐放錠に急速に置き換えられつつあった。

鎮痛補助薬の使用に関するアンケート調査は24施設・822名の医師から回答が得られ、神経障害性疼痛の原因としては脊髄・脊椎転移、腹腔神経叢浸潤、骨盤神経叢浸潤、腕神経叢浸潤、胸壁浸潤などの頻度が高く、鎮痛補助薬としてはステロイド、抗うつ薬、抗痙攣薬がよく使われ、抗不整脈薬、ケタミンの使用はやや少なかった。それらの鎮痛効果についてはいずれも20~30%の症例で有効との評価が半数以上を占めていたが、ケタミンの有効性の評価が最も高かった。またこれらの薬剤の大半が保険適応外使用である現状については、改善を要望する意見が多かった。

7 子宮頸癌に対する Cisplatin と Irinotecan HCl 併用による術前化学療法 (NAC: neoadjuvant chemotherapy) の臨床的効果と病理組織学的変化についての検討

本間 滋・小島 由美・笹川 基
児玉 省二
県立がんセンター新潟病院産婦人科

子宮頸癌Ⅰb期からⅢa期までの18例(扁平上皮癌17例、腺扁平上皮癌1例)に対し、1コース28日間で、Cisplatin 50mg/m²をDay 1に、Irinotecan HCl 50mg/m²をDay 1, 8, 15に点滴静注した。術前に1-3コース(平均2コース)を行い、治療効果を日本癌治療学会の直接効果判定基準、有害事象判定基準及び薬物・放射線治療の組織学的効果判定基準(Grade分類: G)で評価した。内診と画像の判定で、CR: 6例、PR: 7例、

MR: 3例、NC: 2例であった。組織学的には、G0: 2例、G1a: 3例、G1b: 2例、G2: 8例、G3: 3例で、種々の程度で癌細胞と周囲間質の変化を認めた。癌遺残は、画像で浸潤の浅い場合は頸部間質のみであることが多く、浸潤の深い症例は間質反応を伴って筋層にも散在性に認める例が多かった。有害事象は、G3以上の白血球減少12コース(33.3%)、血小板減少はなく、悪心・嘔吐は7コース(19.5%)、下痢は3コース(8.3%)であった。

8 化学放射線療法が奏効した進行外陰癌・膣癌の3症例

西野 幸治・田村 希・鈴木 美奈
八幡 哲郎・藤田 和之・田中 憲一
青木 陽一*・笹本 龍太**
土田恵美子**・笹井 啓資**

新潟大学大学院医歯学総合研究科産婦人科
琉球大学医学部器官病態医科学講座、女性・生殖医学分野*
新潟大学医歯学総合病院放射線科**

化学放射線療法が著効した外陰・膣癌の3症例を報告する。放射線療法; 外照射計 23.8Gy (day 1~4; 1.7Gy × 2/日, day 5~10; 1.7Gy/日), 化学療法; CDDP 50mg/m² (day 1), 5-Fu 1000mg/m² (day 1~4) を1コースとし、2週間空けて2コースを施行した。

〔症例1〕53才、外陰癌Ⅳa期。外尿道口に3cm大の腫瘍、両側鼠径リンパ節転移→pathological CR (pCR) を得、46ヶ月無病生存中。

〔症例2〕66才、膣癌Ⅱ期、膣入口部に2.5cm大の腫瘍、左鼠径リンパ節転移→pCRを得、13ヶ月無病生存中。

〔症例3〕65才、膣癌Ⅱ期。膣後壁に4cm大の腫瘍→pCRを得、6ヶ月無病生存中。いずれもgrade 2~3の放射皮膚炎や好中球減少を認めたが、対処可能な範囲内であった。

【まとめ】外陰/膣癌に対する本治療法は安全かつ有効であると思われた。